

小田実全集（小説 第3巻）

アメリカ

講談社
小田実全集
Makoto Oda

アメリカ

チャーレス——チャーレス・ハーバート・ローガンは画家だった。どの程度の絵描きなのか、私は知らない。二十九歳。代表作は、彼自身のことばによれば、《人間・このまはだかなるもの》

彼はそれをバリで描いた。いや、「描いた」などと言っていないかどうか。

三メートル四方ほどの壁面に、直径、長短さまざまのコンクリート製の円柱が、円型の切り口をこちらに見せて、一面にびつしり植え込んでいる。円柱の配列には、秩序・法則・脈絡、そういつた七面倒くさいものは何もなかった。すくなくとも、作者以外の人間には、きわめて無造作に並べられているように見えた。

一見して、不安であった。円柱は直径、長短ともにさまざまなのだから、そこから安定感が生まれるべくもない。おまけに、切り口の角度がそれぞれ違った。あるものは神経繊維の尖端せんたんのように鋭角に尖り、あるものは眠たげにべつとりと平べつたいまんまるの切り口を見せていた。そして、すべての切り口が、コンクリートのむき出しの地肌そのままだったから、粗くザラザラと乾ききっていた。

これが「絵」なのか。

いや、これのみでは十分でなかった。チャーレスの説くところに従えば、「絵」を完成させるためには人物が要った。試みに、その円柱群のまえに一人の人物を立たせて、十メートルほど後退しよう。そうすると、人物が「絵」の一部となって見える。と言うよりは、「絵」の不安の一部となって見える。

ある円柱は彼を芋刺しにせんとし、ある円柱は大きく頭上におおいかぶさり、あるものは彼の横腹に記憶のように突出し、あるものは彼の股ぐらを、ていねいに、また淫猥いんわいになめた。

これが、その人物が《人間・このまるはだかなるもの》なのか。

そして、チャーレスはこう言いたいのだろう。その彼があなた自身である、と。十メートルの距離をへだてて「絵」を見ているあなたが自分自身を、「絵」のなかに、「絵」の不安のなかに、その一部となつてすであまりにも入り込みすぎている自分自身を見いだすのだ、と。

そうかも知れない。私は、彼がそう言ったとき、ザラザラしたコンクリートの感触を実際肌を感じた。私はたしかに私自身の姿を円柱群のまえに認めたのであるが、同時に、アメリカの青年によくあるように、すでに頭髮が薄くなり、ロイド眼鏡をかけた、ズングリした体つきのチャーレスの姿をも明瞭にそこに認めた。――

とは言つても、私はその「絵」の実物を見たわけではなかった。写真もなかった。

「写真なんか……」彼は鼻でわらつた。「フィルムがあつたら、そのとき、おれはフィルムだつて食べたね」

彼のパリでの貧乏ぐらしの目撃者ポップ・バージェが、いつか言つたことがある。

「パリでのこいつときたら、まったく《人間・このまるはだかなるもの》だったよ。こいつほど、そのことばにぴつたりするのは、そのとき、まあ、いなかつたね。作品より作者が泣かせたねえ。ケチで高名なおれまで、なけなしの千フラン札を作者先生に呈上したんだからな」

「ところで、その知られざる傑作はどうなつたんだ」

私が口をさしはさんだ。チャーレスは肩をすくめた。ポップは妙な顔をした。

「消えたよ、きれいさっぱり。この地上から消失したよ。あとかたもない」

いやにサバサバした口調で、チャーレスが言った。

金のないチャーレスには、パリでアトリエを借りる余裕はなかった。ある日、郊外を散歩しているときに、かつこうな倉庫を見つけた。その一部を格安に借り受け、彼はそれをアトリエにした。円柱芸術を始めたのも、そこであった。《人間・このまるはだかなるもの》がやつと完成したとき、立ち退き命令が来た。彼は倉庫の借り賃をずっと滞らせていたのである。彼には家賃を払う金も、円柱芸術を移動させる金も、そのどちらもなかった。いさぎよく、彼は愛児をたたきこわした。

「まあ、自分の手でやったから、思いきりはよかったな。やつぱり、惜しかったけどね」チャーレスは、一瞬、だまつた。しかし、すぐつづけた。「だがね、負け惜しみじゃないが、あれはあれでよかつたと思うね」

何故なら、彼の表現を借りれば、「絵」は消え去ったあとでも作者の想像力のなかに確固として存在し、確固として存在するどころか、ふくれ上り、ふくれ上りして、その外側にまではみ出して行く。彼はもう今では円柱芸術はやめにして、絵具を巨大なキャンバスに、あるいは叩きつけ、あるいははず高く盛り上げるようにして、ふつうの絵（とは言っても、いぜんとして、わけのわからないしろもの）を描いているのだが、すべてが、そのふくれ上り、はみ出しの所産であった。

「どうりで、あんたの絵はキャンバスからはみ出して、床を汚すんだね」

私が言った。ポップが大声で笑い、チャーレスは苦笑した。苦笑すると、頭髮の薄い彼も、少年の

ようにはにかなり見える。私はそんな彼を好んだ。

チャーレスと私が、この古ぼけたあばら家にひき移つて来て共同生活を始めるのとほとんど同時に、チャーレスのアトリエにあてられた広間の床は、絵具のとぼちちりで極彩色にきわめて華麗に汚れ始めた。これをもチャーレスは「美」であると主張するだろうか。ロイド眼鏡の奥で人なつつこい眼をしばたたかせながら。

大きな男ではなかったが(背丈は私より少し低かった。もつとも、私は日本人としては長身のほうで、たしかアメリカ人の平均身長より上であつた)、骨格が太く、ぜんたいにガツシリとしていて、力があつた。実際、彼はよく力を誇示したがつた。これはアメリカ青年一般の病弊であるのかも知れない。《show the muscle》(筋肉を見せびらかす)という表現を、私はアメリカに来てはじめて知つた。

この南部の小都会クレイトンには、ときどき市フェアが開かれ、近在からお百姓が集まつて来た。お百姓といつても、日本の彼らを想像しては誤りであろう。みんな、もちろん、車で来た。キャデラックで来るのもいれば、自家用飛行機を駆つて来たのだつてゐるかも知れない。

ほかに娯楽のない田舎のことだ、市フェアはたいへんな賑わいだつた。日本の遊園地の博覧会に見本市を加えて二で割つたものと思えばよい。子供連れで来て、展示場をぶらつき、遊戯場のメリー・ゴー・ラウンド、電気自動車、木馬、その他もろもろの動くもの、動揺するもの、激動するものに乗る、またがり、立ち、パブコーン、アイスクリーム、ココラ、ホットドッグ、ハンバーガーのたぐいを腹にぐいぐい押し込む。太陽は輝やき、汗は流れ、むやみに腹がへり、そして、喉がかわいた。

遊戯場の片隅に、その器械はあつた。ばかに単純な器械である。柱が一本立ち、そのねもとにテコがあつた。テコの一端を力自慢の男がハンマーで叩くと、鉄球が柱にそつて昇る。一回がいくらだったか。力自慢はよくそれを試みる。彼はガール・フレンドに、見物の鼻タレ小僧たちに、頭上をカアカアと、たぶん「骨折り損のくたびれ儲け」と高らかに鳴いて過ぎるカラスたちに、いや、誰よりも自分自身に彼の「筋肉を見せびらかす」のであろう。柱の尖端まで鉄球が首尾よく達すると、そこに装着した鐘にぶちあたつて、気持のよい音が鳴りひびいた。

柱には区分けがあつた。上から順に――

よい腕だ／もうちよつと／かなりのでき／半分来たぞ／なまけ者め／弱腕居士／もつと豆を食べる／お嬢さん／ミスター・霧／等々。――

器械のまわりには、かなりの人がいた。三、四人の力自慢を除けば、大半が子供だった。小さいのは鼻タレ小僧、大きなのは高校生らしい少年少女。女の子の喚声のなか、少年の羨望の視線のなか、鉄球が上下し、鐘がときどき鳴りひびく。私も見物人のなかに入つて行つた。

シャツを脱いで半裸になつた男が、懸命に鐘を鳴らしているさなかだった。「たいしたものだけ、これでもう八回なんだ」そばのニキビ面の肥つた少年が私にささやいた。汗が男のはだかの背中を流れ、そして、匂つた。

それがチャーレスであつた。彼は私を認めると、いかにも一仕事終えたというようない表情で笑つた。

「来ていたのかい、サキ。ちつとも知らなかつた。ずっと見ていたのかい？」

「いや、残念ながら、いま来たばかりだ」

見物人たちがいつせいに私を見た。その視線は、はじめに驚愕きょうがく、ついで好奇のそれに変る。チャールスという彼らの力の英雄ヘラクレスと、私という東洋の異邦人とのあいだに、いかなる関係があるのか、あり得るのか——彼らの視線はそれを追い求めているのだろう。さっきのニキビ面の肥った少年までが呆れはてたように私をみつめているのを見ると、私にささやいたときには、私が何ものであるか、まだ認めていなかったのだろう。それほど、彼はヘラクレスの美技に酔っていたのにちがいない。「チャイニーズ?」「チャイナマン?」「ノー・ジャップ」、「ジャパニーズ」——ささやきが起つた。私はそのすべてを無視した。私はもう、そうしたささやきには十分に馴れていたのである。

「《誰がために鐘は鳴る》んだい?」

私は大声で呼びかけた。チャールスは大きなタオルで無造作に体を拭いているところであった。彼とはそれまでに三度会ったきりだが、このふしぎな器械は、二人のあいだの垣根を一挙にとりはらい、おたがいをぐつと近づけた感があった。彼はゆつくりとアロハ・シャツを身につけ、身づくろいをすませてから、おもむろに答えた。

「自分自身のために、そして、ソビエト人民共和国のわが同志諸君に。とにかく、われら合衆国民は、自由を護るために、常に強くある必要があるからね」

高校生らしい少女が二、三人、甲高い声をあげて笑った。ソバカス、ニキビ、それともう一つ、アメリカの高校生を特別に印象づけるものとして、濃くはいた口紅。それなりに、彼女らはかわいい。

「しかし、たぶん鐘はフルシチョフ氏のためではなく、この女の子たちのために鳴ったのであろう」

私はとぼけた口調で言った。彼は笑い、私の肩をどやしつけた。痛かった。たしかにここでも彼は、彼のヘラクレスであるゆえんを示したのである。

そのあと二人で歩いた。「お化け屋敷」のままで彼が言った。

「日本にもこんなものがあるかい？」

「ある」

射的のままで彼が言った。

「日本にもこんなものがあるかい？」

「ある」

綿菓子屋があつた。アメリカにも綿菓子屋があるのだ。いや、あれも、もとはといえば輸入品なのか。綿菓子はいつも妙に私の郷愁をそそつた。子供のときの縁日の記憶がよみがえつて来るのだ。

「日本にもあれがある」

私は妙に勢い込んで言った。チャールスは、ふしぎそうに私を見た。

六十がらみの爺さんが売手だつた。爺さんはゆっくり器械を操作する。みるみる、ふわふわとしたものが、爺さんのもつ箸のまわりにまきついて行く。《Cotton Candy》という横文字を除けば、日本のとまったく同じだ。子供が四、五人、列をつくつて待っている。口をあんぐり開いて、綿菓子という奇蹟の出現を待っている。

「子供はどこでも、みんな同じだ」

私は言った。チャールスはうなづく。

「食べるかい、われわれも」

私は「イエス」と言おうとして、ふと、かぶりをふった。私はあることに気づいたのである。

「実際、子供はどこでも、みんな同じだね」

チャーレスが同じことを言った。

「まあね」

私は浮かぬ返事をした。

綿菓子屋の背後に柵があり、そこで市の敷地は終つていた。^{フェア}「子供はどこでも、みんな同じだ」ということばのとどく範囲は終つていたと言つてもよい。そこから先には、べつの一つの現実がひろがっていたのだから。

子供が六人、柵の外にぼんやりと立っていた。こちらを眺めている。にぶい視線だった。いちようににぶい——いや、私は、もうちよつとのところで、一人の少年の視線を見すごすところだった。

(何言つてやがるんだい) 私には少年がそう言つたように思えた。その視線がそう語っている。汚ない少年だった。ほかの五人が小ぎつぱりとしているのに、彼だけはいやに垢じみたシャツを身にまとっている。貧しいというよりは、たぶん、少年には母親がなくて、それで、こんなにごことなく投げやりなのだろう。少年の頭の上には、強大でむき出しの父親の愛情だけがおおいかぶさっていて、彼を下から支えてくれるはずの優しい柔らかい母親の愛がない。未来の問題児だな——私は思った。十三歳。私は彼の年齢をそうふんだ。

柵ごしに私は少年を見、少年も明らかに私を見た。

「ジャップ」

はつきり少年は言った。

さつきの見物人たちの「ジャップ」と、この少年の「ジャップ」のあいだには、微妙な差がある。すくなくとも、そのことばを言うときの表情には——私は直感的にそれを感じた。その差異が何を意味するのか、私には、そのあと、長いあいだ判らなかつた。

「《ジャパニーズ》と言えよ」

私は少年に言った。それはとがめだてではなく、一種の呼びかけであつた。私はこんなふうにして、子供と大人の双方にわたつて、友人、知己をつくつた。

少年は答えなかつた。表情をかえていた。いや、少年は表情をなくしたのだ。さつきの六人の少年のなかで彼だけには表情があつたのだが、それが私のことばを契機として、一瞬のあいだに、他のみんなと同様のにぶい捉えどころのないものにかえられてしまつていた。もう、彼と他の五人とのあいだには、差異はなかつた。六つの無表情が一つの壁となつて、柵の外にあつた。何十年も昔から、そこにそうやつて動かずにあるように、確固と、そして同時にものうく、だらけた姿勢で存在していた。

「きみの名前は何というのだ」

少年は答えなかつた。私は問いをくり返した。

「リチャード」

少年は一言答えた。

「苗字は？」

答えはなかった。私は二度くり返した。ただ、沈黙が壁からはね返ってくる。

「おじさん、あんな奴らに訊ねるなよ」

さつきのニキビ面の肥った少年が、いつのまにかそばへ来ていた。彼は、あれから、見えがくれに私とチャールスのあとを追って来たのであろう。太い腰ではち切れそうになったズボンのポケットに両手をつまみ、アゴで六人のほうをしゃくつてみせた。

「They are NIGGERS.」(あいつらは《クロンボ》だぜ)

私はうなずいた。と同時に、激しい羞恥が足先から急速に上昇して来るのを私は感じた。

「行こう」だしぬけにチャールスが言った。「話があるんだ」

私たちは歩き出した。私はホツとした。

チャールスの話というのは、それは耳よりな話であった。チャールスの友人が今度北部へ帰る。友人は町外れに、めつぼう安い家を借りていた。平家だが、ぜんぶで四室ある。

「ただしボロ、それも幻想フアンタステイカリ的にボロだよ」

建つてもう三十年になる。たとえば、トイレットは棒で力いっばいなくりつけないと水が流れない。

「このあいだ、きみは寄宿舎を出たいと言った」

いっしょに住まないか、と言う。家賃を折半すれば、費用は寄宿舎と大差ない。

「とにかく、家だぜ。サキ、家だぜ」

彼は歌うように叫んだ。私はうなずいた。

「ほかに誰か来るかい？」

「いや、きみだけだ。もちろん、きみが臨時的にガール・フレンドにベッドを提供するのに、おれは異議を申したてない。そういうことはおたがいさまだからね」

私は、きまじめにうなずいた。

「とにかく、家なんだからな」

「《ホーム・スイート・ホーム》かい」

私は軽口を叩いた。それから、「わるくないな。いつしよに借りよう」と言った。

チャーレスは手をうつてよろこんだ。こういうとき、西洋人の拳動は、気にさわるぐらい大げさだ。

「ワンダフル、ワンダフル！」

彼はくり返して言った。私は几帳面に、その「ワンダフル！」の一つ一つに、うなずいた。

興奮がしずまり、同時に市の出口までさしかかったとき、チャーレスはふと言った。

「奴らは美しいね、そうだろう」

「誰が？」

「あの黒人の少年たちさ」

北部人でインテリの彼は、むろん、《ニッガー》(クロンボ)というようなことばを使わなかった。《ニグロ》という、それよりは少しましなことばも用いなかった。彼は折目正しく、こういう場合のもっとも穏当な表現である《colored》(色がついている)ということばを使用した。たしかに彼のような北部人のインテリは、そんなふうなことばを用いるのであろう。しかし、私は、何かそこに私に対する心づかいのようなものを感じた。

「そうだね……Do you like them?」

私はあいつちを打ち、それから、自分でも思いがけないことを訊ねた。Do you like them?——おまえさん、彼らが好きかい? 私は《them》に力を入れた。無意識的にそうしていた。彼ら——少年たちのことであり、少年たちにかぎられたことではなかった。つまり、色が、ついていてる彼ら。——

「おれは美しいものが好きなんだ」

チャーレスはくつたくなの表情と声で答えた。彼が私の問いの意味を理解していないことは明らかだった。突然、私は激しい焦躁を感じた。距離があり、その距離ははじめから零であるがゆえに越えられない距離なのだ。

「そうか、きみは美しいものが好きか」

「イエス」

チャーレスは言い、そして、歩いた。私も歩いた。

2

チャーレスは北部人^{ヤンキー}だった。ニュー・イングランドの田舎町で生まれ、エール大学の美術学部を出た。兵役をすませたあと、パリへ行った。

パリには二年半いた。金はどうしたんだと訊くと——

「いつか面白い漫画を見たことがあるよ。シャンゼリゼの喫茶店で、アメリカ人が四、五人集まって話をしているんだね。一人が言う。『おれはフォードで来ている』他のやつが言う。『おれはロックフェ

ラーで来ている』もう一人が『ぼくはフルブライトで来ている』……判るかい、この連中は、みんなフード財団やらロックフェラー財団やらフルブライト留学生プログラムから、お金をもらって来ているというわけなんだな。これは今日のアメリカの流行だよ。みんながそう言う。すると、見すばらしいふうていをしたのが、横から口を出すんだ。『おれはおれ自身で来ているんだ』ってね」

チャーレスは口をすぼめて、皮肉に笑った。

「あなたはどうなんだい。あなたはあなた自身でパリへ行ったのかい」

彼はうなずいた。

「いろんなことやったよ。会話の先生、ボーイ、似顔絵描き、英字新聞の立ち売り、ジゴロ、無為徒食……」

「何故、パリへなど行ったんだ。あなたの傑作《人間・このまるはだかなるもの》を作るためかい」

「なに、流行だよ。アメリカ人は、すべて成年に達すると、ヨーロッパへ行かなければならないと考える。何故そんなふうを考えるか、これは世紀の謎だね。きみ、知っているかい、アメリカの若者がパリへ着くと、まず何をするか」

「エツフェル塔へでも昇るのかい」

「それはお上りさんのやることだよ。観光バスにつめこまれて、右はセーヌ河、左は凱旋門、オー・ワンダフル、スプレンドイド！ と叫ぶ善男善女のやることさ。お上りさんでない連中は……」

「すくなくとも、自分でそうでないと信じている連中は……」

「皮肉を言うなよ。とにかく、そういう連中は、パリに着くとすぐ本屋へ駆けつける。そこで、パリ

で発行されてアメリカやイギリスでは発禁になっている《不潔な本》^{ダーティブックス}を買いたがる。たとえば、ヘンリー・ミラーだ。このあいだ、きみが読んでいたのだから、あれはおれがバリから密輸入して来たものなんだ。わかるかい、おれの言う意味が……アメリカつてところには、まだまだ、そんなところがあるんだな」

ヘンリー・ミラーといつしよに、彼は、脳細胞のなかにいろいろなものをぶちこんで帰って来たのだろう。アメリカに戻るとすぐ、ニューヨークのスラム街に居を定めた。種々雑多な職業を転々とした。最初はよかつた。あるカレッジで絵を教えたのである。ふた月でクビになった。教頭と喧嘩したのである。トラックの運転手になった。レストランの給仕になった。西部物専門の出版社にやとわれ、彼の表現を借りれば、「ピストルと保安官とインディアンに明け暮れた」こともあつた。日本で言うなら、チリンチリンのゴミ屋さんもなつた。(ただし、アメリカのゴミ屋さんはチリンチリンなどという風流なことは一切しない。夜半、うしみつどき、突如としてゴミ屋をのつけた巨大な自動車^{トラック}が現われ、轟然とすべてを持ち去る。つまり俳句と叙事詩の差であろう)

ある画廊で開いた個展が運のつき始めであつた。ニューヨーク・タイムズがかなりよい批評を書いた。もつとも、記者が隣りの画廊へまちがつて入つたからだという説もある。これは、チャーレス・ハーバート・ローガン氏の説だつた。

絵が売れた。いろんな経費を引くと、三〇〇ドルが手もとに残つた。彼は旅行に出た。南部へである。それが、彼のかねてからの懸案であつた。

ある町に来ると(その町名をきくと、彼は「忘れた」と、しごく単純に答えた)、ここはウィリアム・

フォークナア氏の居住するところであるという。彼は会ってみる気になった。

チャーレスは画家でありながら、あつてもべつにかまわないわけだが、文学好きで、なかでもフォークナア氏は敬愛する作家であつた。氏は文学青年などに会わないので有名な、あるいは、悪名高い作家である。こういう男に会うのこそ、面白いではないか。

町でぶらぶらしていると、フォークナア氏の知人だと称する男が現われた。散髪屋である。氏をよく知っていると。

「なにしろ、あの方はあつしの先生だつたんでさあ。今でも、ロオタリ・クラブでおつきあい願っていますかね」

彼は心やすげに言つた。フォークナア氏が散髪屋の先生だつたというのはどういふことか。それに、氏がロオタリ・クラブのメンバーであるなどという話も寡聞にして知らない。しかし、一業種から代表一人という原則をもつロオタリ・クラブのことだ、作家が入つていても、べつにおかしくないだろう。氏は名うてのつむじ曲りだ。世評の裏をかいてロオタリ・クラブの会員におさまり、きまじめな顔でフォーク・ダンスでも踊つているかもしれない。フォーク・ダンスのまつさいちゆうに、氏に質問をぶつつけてみる。「えーと、先生のあの難解きわまりない文体は、この軽快なるリズムの所産でありますか」フォークナア氏は手を叩いてよろこぶにちがいない。それとも、ヘラヘラ笑うか。

チャーレスは散髪屋といつしよにロオタリ・クラブのパーティに出かけた。

「この方がフォークナアさんです」

紹介されたのは、腰の曲つた爺さんだつた。もう八十をすぎているにちがいない。いつのまに、フォー

クナア氏はこんなに年をとったのだろう。「あなたはこの散髪屋氏を教えたのですか」、「イエス、彼はぎわめてできのよい生徒であつた」、「ところで、あなたはどこで彼を教えたんです」、「散髪学校だよ」老爺は、何をこのトーヘンボクめ、判りきつたことをぎくのか、というような顔をした。作家のフオークナア氏ではなくて、散髪学校の先生のフオークナア氏であつたわけだ。今は引退して、町でドラッグ・ストアを開業しているという。――

「あなたはフオークナアの写真を見たことがないのかい？」

私は訊ねた。

「おれは記憶力がダメなんだ」

「だから絵描きになつたんだろう」

チャーレスは、彼が予想したフオークナア氏のようにヘラヘラ笑つた。

その代り、そのパーティで、偶然、モンゴメリ氏に再会した。彼は南部の大学の先生であつた。それも、えらい先生で文学部の部長か何かをしていて、チャーレスに言わせると、「ばかだが、いや、ばかだから、その点において、よい人」であつた。

チャーレスはモンゴメリ教授とパリで出会つた。金のないチャーレスはアメリカ人の泊る高級ホテルのロビーに現われては、フランス語の喋れない善男善女、紳士淑女、爺さん婆さんのガイド役を買つて出、それでタダメシと小遣いにありついていたのである。モンゴメリ教授と会つたのも、そういう機縁からであつた。

「パリの庶民の魂を知りたい」

教授はおごそかに宣言した。チャーレスはモンパルナスの自分の下宿に連れて行つた。

「ユトリロだ」

教授は、チャーレスの傾きかかったオンボロ下宿の外観を見て嘆声をあげた。いろんな奴に会わせて。まず下宿の主のウジ虫婆さん。次いで、そいつの妹の毛虫オールド・ミス。隣室のゲジゲジ保険外交員。向いの室のレストランの青虫ウエイトレス。三階の事務員。お針子。――

「しかし、何がいちばん彼の印象に残つたと思う？」

「……………」

「おれの下宿の洗面所で、湯が出なかつたことだよ。こんなところに、きみはよく住んでいるな、と言つたね。ユトリロだからな、とおれは答えた」

モンゴメリイ教授は再会をよろこんだ。

「パリはすばらしかった」

チャーレスの顔を見るなり言つた。彼はチャーレスの個展の成功を知つていた。「インテリだからね、『ニューヨーク・タイムズ』でもとつているんだろ」チャーレスはそう言う。

乞われるままに住所を教えた。南部旅行を終えてニューヨークに帰つて来ると、先まわりして一通の封書がモンゴメリイ教授からとどいていた。教授の大学へ美術の先生で来ないかというのだ。教授の大学K―大学にも美術学科があつて、そこで実技の講師を求めている。それに就任しないか。――

「あなたの代表作、例の《人間・このまるはだかなるもの》を教授が見ていたら、教授はあなたを呼んだと思うかね」

「二つの可能性がある。やとわなかつたか、それとも精神病学の貴重な実例として、月給倍額でやとつたか」

チャーレスは引き受けることにした。南部でしばらく遊ぶのも悪くないし、第一、月給四〇〇ドルは、彼にとつて、それは天文学的に大きな金額であつた。

「なにしろ、おれは、六〇ドルから一〇〇ドルのあいだで暮していたんだからな。ロックフェラーになつた気持だつたね、はじめて四〇〇ドルを貰つたときは」

K—大学はL—州の小都会クレイトンにあつて、南部の名門大学としてきこえている。「南部のハーバードというところだ」私がそう言うと、「いや、エールだ」チャーレスはエール出身者らしく、几帳面に訂正した。それでいて彼は、母校のことをいつもくそみそに言っているのだが。いや、彼はきつと、このK—大学はエール大学と同じように、学者バカの集団収容所だと言いたいのだろう。

K—大学に来てみると、パリで知り合つたポップ・バージェが英文科の講師をしていた。ポップはロシア系のユダヤ人で、詩人志望の文学青年であつた。小柄で、むやみと毛深い男である。日本の高名なある小説家は胸毛にあこがれ、自らの胸毛の貧弱さを嘆じたということだが、彼などはポップのそれを植毛してもらつたらよいと思われる。あんなにも繁茂した胸毛を見たことがない。私は、チャーレスとポップとよく泳ぎに出かけて、いつも目をみはつた。

「もう一人、つけ加えるべきだな。K—大学へ来て、会つた人間は」

チャーレスは片目をつぶつて言うだろう。私は答える。

「そうだ、あんたはえらい人に会つたよ。日本人サキこと川崎登氏。……」

それは、つまり、私だ。

私の経歴を、ここで簡単に書いておこう。いつか、チャーレスもそれを訊ねたことがある。そのときの質問一答を再録しておこう。

「生まれは？」

「大阪だ。日本のシカゴだね。工業都市。煙の都。シカゴが無限に汚なく騒々しく、そして無限に美しいごく、大阪も無限に汚なく騒々しく、そして無限に美しい」

「いつ？」

「一九三×年だから、チャーレス、あんたより三つ下だ。つまり、当年とって二十六歳というわけだ」

「家族は？」

「オヤジはいない、死んだ。母親はいる。兄が一人、姉が一人。いちばん末がサキ君だ。その他、妻もいない。子供もいない。目下、恋人もいない」

「すくなくとも、現在、ほんの瞬間的な現在についてはね」

チャーレスはニヤリとした。

「あと何を訊いたらいいんだ、めんどくさいな」

「宗教は《ZEN》。ただし、おれは何も知らんね。家のほかの連中も何も知らぬ。つまり、家代々、そうだったというのにすぎぬ。生活の信条、これはない。理想、社長になること。それがかなわぬなら、一生眠りつづけること。それで、おれは眠ってばかりいるんだ」

「日本で何をしていたんだ？」

「サラリー・マン。大阪の商社会社の社員。会社に入ったのも、べつに理由ないな。就職試験のとき、実は新聞社と商社会社と二つ受けたんだ。どっちも外国へ出られるチャンスがあると思つてね。チャールス、あなたには判らんだろう、日本の青年がどれだけ外国に出たがつているかってことが。たいへんなことなんだぜ、日本人が海外へ出るのは……」

「フム」チャールスは気のない返事をした。「しかし、きみはアメリカへ来た」

「そうだ、来た」

「何のために？ ……おや、これはきみがいつか訊ねた質問だ。何のために、ぼくがバリへ行つたかつてね」

「そして、あなたは、流行だから、と答えた。おれも同じ答えを言つておこう。外国へ出るのが、とにかく日本を脱け出るのが、すくなくともそんなふうにしたがるのが流行だ、と」

「そうすると、行先はべつにアメリカでなくてもよかつた、ということになる」

複雑な気持が私の胸のうちに渦まいた。私はその気持を茶化し、それよりほかに、気持を処理する方法はなかつた。

「いや、アメリカだよ、アメリカでなくてはならなかつたんだ。世紀の大画家チャールス・ハーバート・ローガン氏に会うために、はたまた、一つ屋根の下に住む光榮に浴するためだね」

「もういいよ」

彼は手をふつた。私はチャールスがついでくれたジンを一杯飲み干し、それから、自分の経歴の無味乾燥な事実の羅列を心のなかで始めた。

新聞社と商事会社の入社試験を受け、結局、私は商事会社に入った。それも、私の意志によつたのではない。就職難のころだったから、先に合格が決定したほうに決めなければならなかった。

会社は二流の上、戦後派の新興会社だった。戦前はチツポケな個人商店。それを今日あらしめたのは、ゴマスリ重役たちが平素いつもいように、社長がそれを受けて鷹揚に磊落らいらくに否定するように、銀行からむかえられた入り婿社長のおかげだった。銀行出身にかかわらず、いや、それゆえに銀行を迫られたのであろうが、社長には豪傑肌のところがあつた。そういうことを自分で十分すぎるほど意識していた点でも、彼は典型的な日本財界の豪傑だと言つてよい。私は遅刻し、サボり、ズケズケと上役にものを言い、いばり、いわば破れかぶれにやつてのけながら、有能で前途有望な若手社員だった。すくなくとも、そういうことになつていて、社内での評判はふしぎに悪くなかつた。

「You are smart.」

日本で私に英語会話を教えたオールド・ミスのアメリカ婦人は、口ぐせのように私に言つた。スマート——たしかに、そのことはほど私に似つかわしいことばはないだろう。私はスマートに遅刻し、サボり、いばり、上役に文句をつけ、スマートに仕事をし、同僚とつきあい、スマートに破れかぶれ——つまり、私はスマートに豪傑であつたのだ。そして、その点で私は社長のあとを追う者だつたと言えるだろう。

肉体的にも、私は自分をスマートだと定義していた。いわゆる「日本人ばなれのした」長身。「日本人ばなれのした」彫りの深い近代的な顔。すらりとして、足が長かつた。シングルの背広がよく似合つた。私ほど洋服が板についているのは、社内にはいなかつたであろう。と言つても、私はお洒落

であったのではない。きわめて無造作に、月賦デパートのできあいの吊しの服を着ていた。その無造作さを自分でよく意識していた。「ほんとお洒落はこんなんだよ」私は筋の消えたズボンの膝を、よく女の子のままでパンパンと叩いてみせた。

秀才ではなかった。いや、入社試験は一番で入ったのだが、私に秀才らしい臭みはなかった。それに、私はスポーツマンだった。近代社会では、ことに日本のそれでは、スポーツマンであることは、何ものにも代えがたい特権であり美点であり隠れ蓑だろう。「スポーツマン」の一語は、人に次のようなことを証拠だてる免罪符をあたえる。思想穩健(灰色あるいは皆無と言いなおしてもよい)。さっぱりとフェアな男(その下には、いかなる狡猾さも、彼はかくすことができる)。男らしい男(私は、そういう男の精神の底辺にひそむ鼻もちならない女性的なものを知っていた)。近代人(彼の内部がいかに古めかしいものに満ちていようと)。

スポーツはなんでもした。なんでも、ある程度はできた。ことに水泳。大学時代、私は水泳部のレギュラーだった。たいした記録も出したことはないが、会社の慰安旅行で海へ出かけたとき、女の子の目をみはらせるぐらいのことは容易にできた。

女の子が私に親切だったのは、言うまでもない。必要以上に、たいへん親切だったのも数人いた。私は、しかし、誰ともまんべんなく深入りもせず、と言つても厭味でもなく、つき合った。

そのうちの一人が、ある日、言つた。

「誰にも好意をもたれるつて、たいへんなことね。それは、誰にも川崎さんが好意をもたないつてことだもの」

いやな女だった。文学少女。発育不良。扁平な胸、腰、尻。ニキビ。眼だけが大きく、きれいだった。何故、あんなことを言ったのか、わざわざ喫茶店まで連れて来てやったのに。

私は黙っていた。ジャズ喫茶で、ものすごいポリュームの音が響いていた。いつもなら、私はそうした音、騒音を聞くと胸がスカツとする。それが、そのときは、どうしたわけだろう、妙に重苦しく、耳にべとついて来た。疲れているのだ、と私は思った。会社へ入ってはじめて、いや、生まれてはじめて、疲労というものを私は感じたように思った。今までも、スマートな疲労なら、千五百メートルのロングを泳いだあとで、徹夜で決算報告書を上げたあとで、感じたことがある。が、この疲労は、このスマートでない疲労は——

女がふいに言った。

「小英雄……そうね、小英雄ね、川崎さんは」

その夜だった、私がめずらしく泥酔したのは。行きつけのバーをさげ、場末の飲み屋で私は酔いっぶれ、誰かと喧嘩し、気がついてみると、見知らぬ女の室にいた。

「あんな、不潔だわね」

女はそう言った。《不潔》——それは、私をはじめて聞くことばだった。すくなくとも、自分に投げかけられたものとしては。それは《スマート》と正反対な意味をもつことばではないか。女が、何故、そのことばを私に言ったのか、言わなければならなかったのか、私にはわからなかった。ただ、ことばの意味は鋭く私の胸に、私の全身に、突き刺さった。《スマート》、《小英雄》、《不潔》——その三つのことばには、それぞれどこかに共通するものがある——私は女と性交し、たぶん小英雄らしく不

潔にそれをやつてのけながら、しきりにそう思った。しかし、それは何か。その共通するものは何か。翌日、二日酔いに痛む頭をかかえながら、私はいつものように会社の机についていた。書類の山。報告書の束。書かなければならない英語の手紙。私は、しかし、そのままでもまったくべつのことを考えていた。私は決意したのだ。《スマート》、《小英雄》、《不潔》——この三つのものから、私は脱け出さなければならぬ。そのためには、会社をやめよう。いや、それだけでは十分でない。私はこの社会から、つまり日本から、外へ——「アメリカへ行こう」

私が何故「アメリカ」と思ったのか、何故デンマークでなくフランスでなくケニアでなくウガンダでなくインドでなくシリアでなくニューギニアでなく、何故「アメリカ」なのか、私は知らない。いちばん容易に出かけられる外国と言え、それは、むろんアメリカだろう。たぶん、私のその決意の底にも、そのことが潜在意識として働いていたのだろう。それもある。たしかにある。しかし、その決意の瞬間に、私の心のなかで結びついたのは、たとえば「新大陸」ということばであり、「開拓者魂」ということばであった。私は広大な原野を思い浮かべた。そこを矢のように走る自動車。その自動車の行手に、こつせんと出現する摩天楼。すべてが大きいだろう。英雄がいるとすれば、それは《大英雄》だろう。それにぶつかって行く。スマートではなく、シャニムニ、全身で私はぶつかって行く。——

「社長がお呼びです」

給仕が私を呼びに来た。

「アメリカへ行かないか」

社長は、私の顔を見るなり言った。私はよほど奇妙な顔をしていたのにちがいない。社長はくり返し言い、それから、これは支店勤務ではない、留学なのだ、だから、わざわざきみをここへ呼んだのだ、と説明し始めた。社長の説明は簡にして要を得ていた。

——きみを第一回生として、会社の派遣留学生制度をつくる。期間は二年。ビジネス・スクールに留学してもらおう。アメリカの近代経営法を学んでおくためのほかに、ビジネス・スクールの先輩（みんなえらくなっているにちがいない）、同級生（未来のアメリカ経済の支配者だ）を通じて、現在、将来にわたって、アメリカという資本主義社会に食い込む。「まったく社長らしく、放胆にして細心の計画ですな」専務が横からお世辞を言った。

社長は鷹揚にうなずき、磊落に笑った。

「きみには、南部のK—大学とこのを知っているだろう、南部一の名門だよ、そこへ行ってもらおう。クロンボの多いところだが、クロンボの女つてのは、あれでなかなか魅力のあるもんだ」彼は体をゆさぶって笑った。それから、低い声でつけ加えた。「南部にも、うちの支店をつくりたいんだ。その下見もかねているんだよ。きみにやってもらおう」

なるほど、放胆にして細心の計画だ。ことに、私を選んだ点において、そうだろう。私もまた放胆にして細心——私という《小英雄》なら、社長のもくろみの上ですべてをきわめて有能に、そしてスマートにやっつてのけるだろう。チャンスだった。これで、私はもつとも確実な出世コースに乗ることになるのだ。それに私自身、いまさつき、ほんの十分まえ決意したばかりではなかったか、はつきり「アメリカへ行こう」と。

しかし、私は黙っていた。ものを言うにはあまりにも複雑な感情が私の体内に渦まいていた。たしかに、私は「アメリカ行」を決意した。それは、自分の意志によつてであつた。自分の意志によつて、自分を叩きなおすために、自分から脱け出るために、自分で自分に全身でぶつかるために、私はアメリカへ行こうと決意した。だが、そのとき、アメリカはすでにアメリカでさえないのだ。ちょうど、「モービー・ディック」のあの「白鯨」のように、それはエイハブ船長ならぬ私の精神のまえに立ちほだかる、一つの巨大な壁であつた。――

「アメリカは、やはり、一度見ておいたほうがいいよ」

社長はつづけた。社長にとつて、むろん、アメリカはたんにアメリカという外国であり、取引先であり、自由の女神であり、ウォール街であり、民主主義の老家であり、コール・ガールであり、ペンタゴンである。つまりは「一度見ておいたほうがいい」ものなのであろう。こんりんざい、エイハブ船長の「白鯨」ではないだろう。あの巨大な壁では決してあり得ないだろう。

「じゃ、いいね。O・Kだね」

社長はアメリカ人の発音をつかつて言った。私はうなずいた。「O・K、O・K」私はうなずき、自分にくり返しそう言った。アメリカ人らしい発音で、くり返した。「O・K」一つあてに、何か大切なものが一つずつ失われて行く。私はそれを感じていた。

アメリカは、私にとつて、もはや「白鯨」でも壁でもなかった。それは《小英雄》の仕事場――その有能さとスマートさと愚劣さと、そして不潔さを示すためのかつこうな舞台。

「しつかりやります」

私は言った。社長が手をさしのべ、私たちは握手した。

「ビジネス・スクール」——これはアメリカ社会のまったくアメリカ的な産物であろう。どう日本語に訳したらよいか。「経営学部大学院」と言えばよいかも知れない。経済学部はべつにあつた。そこでは、経済の理論的・基礎的研究をやり、ビジネス・スクールでは、実地の「ケース・スタディ」とか称するものをもつぱら行なうことになっている。会社をどんなふうに経営したらよいか。改善するには、維持するには、生きのびさせるには、かすめとるには、ぶつこわすには、それぞれどうすべきか。一つ一つの実例にもとづいて、それがきわめて实际的に現実に研究される。

秀才がむらがり集まつて来た。これは、いわば未来のアメリカ経済を、アメリカ社会自体を、そしてたぶん世界を動かすアタマをつくり出す、そういう企図でつくられたぜいたくきわまる温室であつた。

直接の実利もあつた。北部のハーバード、シカゴ、スタンフォード、南部ならこのK—大学のような、歴史と伝統を誇るビジネス・スクールを出たのと出ないのでは、初任給が大きく違つた。未来への可能性も違つた。アメリカに学閥がないなどは、どこのどいつがほざいたことだろう。「新大陸」アメリカも、すでにそういつたものを内部に包含するまでに成長し、爛熟して来ているのだ。

授業は厳しくつらかつた。そのつらさは、しかし、未来の収入と可能性に払われるべき当然の代償なのだろう。膨大なテキストを膨大な量、読ませた。週に一度「クイズ」と称する小試験。レポートの提出。討論。いつか、友人がこぼしたことがある。

「これではデイトのひまもないね」

「英語」というハンディキャップが私にはあった。かなり英会話に自信のあった私も（英語に関して）私は会社の《小英雄》だったのだ）、最初のうち泣いた。ことに、ここの英語は鼻にかかった南部英語だ。チャーレスでさえ、ときには判らないことがあると言った。

しかし、やがて、私はハンディキャップをアドバンテージに転じることを覚えた。私は怠けはじめた。怠惰から来るもろもろの不都合を、私はもっぱら英語のせいにした。真実は、私の英語も、さして不自由なものになりかかって来ていたのだが。

「旅をしたい」

私はときどき発作的に思った。しかし、どこへ行けばよいのか。そして、いったい、おれは何のために来たのだろうか。何故、おれはここに居るのか。私はときどき発作的に、しかし、切実に思った。

すでに、アメリカに来て一年が経っていた。

「きみは書かないのか」

チャーレスは、ボツに紹介されると、まず私に訊ねた。南部在住の女流詩人の詩の朗読会の席だった。K―大学出版部は「K―評論」という文学雑誌を出していた。それが、ときどき、こういう文学的な催しを開き、私は退屈まぎれに二、三度出た。ビジネス・スクールを怠けるとなると、この田舎町では、ほかに何をするところがある。好奇心と退屈——この二つが結びつけば、人はいかなる無益なことにも精を出さう。私はミシシッピ河の支流K―川で泳ぎ、そして詩の朗読を聴いた。

毛色の変わったものは、古今東西、人の興味をひく。私は会合のきも入り役をしていたポップとすぐ知己になった。

「きみは書かないのか」

チャーレスに二度目に会ったのは、外国人学生交歓パーティーの席でだったが（彼はフランス語が話せるというのでひっぱり出されたのだろう。それにプラスして好奇心と退屈）、そのときも、彼はそう私に訊ねた。

二度とも、私はかぶりをふった。

「本はすでに余りに多く書かれすぎている」

こんな場合、書かない、いや、書けない文学青年が必ず口にするにちがいない月並みで利いたふうなセリフだった。言ってしまったから、私はそれを意識した。

「しかし、きみの本はまだ書かれていない」

チャーレスは重々しく言った。彼は軽く言ったのだろうが、私の耳にはへんに重々しく、また重苦しく響いた。

チャーレスと共同生活を始めたあとでも、私は、ときどき、そのことを思い浮かべた。しかし、彼はもう何も言わなかった。「きみは書かないのか」と、もう一度、彼は訊ねなかった。

3

「どうだい、チャーレスとの生活は」

教室を出がけにレットが肩を叩いた。彼の口調には、あんな変人と暮してうまく行くはずがないという、期待とも確信ともつかないものがあつた。それが、必要以上に私に明るい声を出させた。

「うまく行っているよ。すばらしい、と言つてもほとんどいい。ただし、おたがいに、もう少し金があればね」

「一度、訪ねていいかい」

「ああ来いよ。ただし、びつくりするぜ。それは言つとこう。まず家がボロだ。次いで、日本のことわざを教えてやろうか。ことわざというのは、古代からの人間の知恵だからな。きみのような若者は知つておく必要がある」

「いいよ、判つたよ。何ということわざだ」

「男世帯にウジがわく、というんだ。ところで、わが男世帯には、独身者が二人だ。それもズボラな天才画家と、きみの言う詩人ないしは犬儒派哲学者……最悪の事態だよ、これは。ウジ虫どころじゃない。わくのはきつとサナダ虫だ」

レットは露骨に不快げな顔をした。

「来るかい、それでも」

レットは少年のようにコックリうなずいた。

「いつ？」

「いつでもいいさ。たとえば、今日の夕方はどうだ、いつしよにうちで飯を食おう」

「いいね」

「じゃあ、あとで」

「あとで」

私たちは簡単に別れた。レットとは、いつもこんなふうにあつさり会い、あつさり話し、あつさり別れた。

ときどき私はレットに対して、どうしてこう自分がいつもシニカルになるのか、いぶかしむときがあった。レットは親切だった。善意の徹底的な持主であった。私は彼といると、彼の善意に包まれ、親切におおわれ、息苦しくなる。それが私をシニカルにさせるのだろうか。私はときどき、彼の一方的な親切に腹を立てた。しかし、その腹を立てたことが彼に通じたことは一度もなかった。

寄宿舎にいた一年、レットは私の隣室の住人だった。のみならず、彼はビジネス・スクールでの同級生であった。大学院学生といつても、彼はまだ二十一歳、ほんの坊やだった。アメリカの小学校では、できのよい子供は一級とぼして進級することができる。やたらに若い大学生、大学院生がいるのも、現代アメリカの一つの特徴であるのかも知れない。これは伝説に近い話だが、シカゴ大学に十三歳の天才少年大学生が、一時いたという。彼らはよくできた。若いだけに、子供だけに、記憶力はよく、雑事に追いまわされることもすくないせいだろう、年輩の学生よりかえってできがよいくらいだった。彼らには人生経験から来る知恵、あるいは、その過程で得た雑学的知識はなかった。ただ学業があり、成績があつた。彼らの知識は、だから、ピラミッドではなくて、尖塔だった。尖塔はするどく雲を突き破つてそびえたつたが、ときとして、ちよつとした風にもゆらいだ。日本の大学の女子学生の秀才

ぶりも、これにいくぶん似ていると言えよう。「学者犬だよ」チャーレスは、いつかシンラツなことばを吐いた。

私がレットに対してシニカルになるのには、しかし、ひよつとしたら、レットがそんなふうで、きること、「学者犬」であることへの反感があるのかも知れない。もつとも、この「学者犬」は気持のよい「学者犬」であつた。英語の点で苦境におちいつた私を、彼は教室でしばしば助けてくれたのである。ときどきは彼一流の、いや、アメリカ人の善意一流のひとりよがりの早合点をやりながらではあるが。

レットの私への接近の仕方、きわめてアメリカ人的であつた。つまり、仕方何もなかつたのである。

「レット・ジャクソン・テイラー。きみの隣人」

去年九月のある日、日本から二週間がかりでやつて来て、ようやく寄宿舎の狭い一室に落ちつく、すぐ頭をG・I刈りにした若者（第一印象は「若者」ということば以外では言いあらわしようがない。アメリカの大学なら、どこでも見かけるごく普通の大学生）が現われ、そう自分から名乗つた。

彼は立つたままで話した。あとから考えてみると、それは、私が「坐れ」と言わなかつたためだろう。彼には良家の出らしいそんな折目の正しき、礼儀の正しきがあつた。その折目は彼のからだのうち、ちいまでついていて、彼の精神は、仕立て下ろしのタキシードのズボンのように、ばかみたいにピンと張っているにちがいない。ときどき、彼は彼の精神にもやはりアイロンをかけるのだろうか。毎日曜、彼は教会に行つた。

立つたままで、彼はいろいろなことを話して行つた。ビジネス・スクール一般について注意すべきこと、どの教授がすばらしいか、またすばらしくないか、教科目のえらび方について——彼は親切だった。親切にいろいろなことを語ってくれたのだが、あいにく、そのころの私の耳はレットの南部英語を理解する能力に多分に欠けていたのである。私は「イエス」とか「アイ・シー」とか、ただそんな簡単な相槌をうつのみであつた。言うだけのことを言つてしまうと、彼はさつと別れを告げた。

「ではあとで。夕食は六時半からだよ。さつき言つた通り、ぼくはきみを六時に誘うよ」

いつのまにか、私は彼によつて食堂に案内されることに決まつていたものらしい。外国語で話していると、よくこんな羽目におちいる。私は苦笑した。

六時かつきり、ドアにノックの音があつた。六時半、夕食は始まつた。レットはすでに十年の知己のようである。私に親しげに語り、私の名前をすばやくもう一度確かめながら、同時にわたわらの友人に活潑に紹介するという器用な芸当をやつてのけた。「アメリカ人だな」と私は思った。それは、ロサンゼルスからニュー・オルリーズまでの飛行機のなかで、隣席に坐つたインド人留学生のこゝとばを思い浮かべたからである。

「アメリカ人つてのは、友人をつくるのも忘れるのも早いね。なにごととも、この国ではスピードだ。十分できみは年来の親友となり、十分でもとのモクアミ、アカの他人となる」

たしかに、十分の何万倍、一年たつた今では、レットはすでに私の親友であることにまちがいはなかつた。そして、すくなくとも、アカの他人ではなかつた。

私はいささかレットについて、でくの坊的底抜け善人の印象をあたえすぎたようだ。レットは「学

者犬」ではあつてもバカではない。いや、「犬」などでは決してなく、彼は野心満々の男なのだ。

「ビジネス・スクールに来て、よかつたと思うかい」

ある日、チャーレスが私に訊ねた。

「まあ思うね」

「どんな点で？」

「さあね……たとえば、自分と同じタイプの人間をアメリカにも見いだしたこと」

「どんなタイプだ」

「ステイタス・シーカー
『地位を求める人』」

チャーレスは意外な顔をした。

「きみはそうかい？」

「そうだ。だから、同類をたくさん見いだしたわけだ。たとえば、われらが共通の友レット・ジャクソン・テイラー。きみの言う学者犬の一匹だ」

「ぼくは、きみがそうだとは思わない」

「しかし、真実はそうなんだ。だから、ぼくはレットとだつてうまくやつて行ける。きみなら、がまんがならないだろうが……」

「ぼくは、きみがそうだとは思わない」

チャーレスはくり返した。何故か、私はいらいらしてきた。

「ぼくは日本では商社員だつたんだぜ。ジャパニーズ・コンフォートミズム 日本画一主義の本拠みたいところにいたんだ。そこで、

きわめて有能な社員だった」

「しかし、きみにはほかの一面がある」

チャーレスは頑固だった。私は話題をかえた。

「ただね、アメリカの《地位を求め人》ステイタスシーカーと日本のそれとが異なる点の一つある」

「何だね」

チャーレスは興味なさそうに言った。

「アメリカのは、彼らはまず、いかにして《自分を売り込むか》に専心する。つまり、自分から出発する」

「日本のは？」

「日本人の場合は逆だ。われわれには《自分を売る》という思想はない。あつたとしても、そいつは悪徳であつて、アメリカでのように美徳ではない。K—大学の入学志願書を送ってもらつたとき、ぼくがまず何におどろいたと思う？」

「何だね」

「自分のこれまでの経歴、これからの計画を書かせる欄があるだろう。あそこに《自分をうまく売る》ようにとの注意書きがあつたぜ。なるほど、アメリカだと思つた」

「日本人は謙譲の美徳をもっているからね」

「そうかな、きみはそう思うかい。日本の《地位を求め人》はね、相手から出発するんだ。自分を売ることじゃなくて、相手をいかに蹴落すか。……」

「きみは蹴落して来たのかい、これまでで？」

私は黙った。それから話題をかえた。

「レットの話をしよう」

「しよう」

「ぼくは、レットは標準的なアメリカの若者だと思う。あれが未来のアメリカをかたちづくる」

「ぼくはどうかね。その資格はないのか」

「ないね」

私は素気なく言った。チャーレスは微笑した。微笑しながら言った。

「サキ、しかし、アメリカは広いんだぜ」

レットがまずたまげたのは、雨もりであった。いや、彼がその夕方訪れたとき、雨はべつに降らず、いつものように輝かしい南部の秋の星空がいちめんにわれらの頭上、われらチャーレスと私の家の上にひろがっていたから、正確には、天井から壁にかけての壮烈な雨もりのあとと云うべきだろう。アメリカでは、日本のように雨はそうむやみと降らない。それは不幸中の幸いだと言うべきだが、いったん漏り出せば始末におえない。

「チャーレスの絵が一夜にして変貌したことがあるぜ」

「彼は悲観しただろうな」

「よろこんでいたよ」

レットは妙な顔をした。それは事実だった。雨もり画伯の加筆を発見したとき、はじめチャーレス

はえらく悲観的な声を出した。ついで、それは歓喜の叫びに変わった。「サキ、見ろよ。これはすばらしい絵だぜ。そう思わないかい。すばらしい絵だぜ」そうかも知れない。すくなくともチャーレスの斜めについた美的意識には、そんなふうに映つたのであろう。太く、また細く走る泥色の筋は、絵に一種の効果をあたえていた。

「その絵はどうしたんだ」

「たたきつぶしてしまつたらしいよ」

「……………」

「芸術家は気狂いだよ。えらい奴と住みはじめたもんだ。おれまでおかしくなつてきた」

「だから、よせ、と言つたんだ」

レットは私のことばをまともにとつて、兄貴のような口のきき方をした。レットはモンゴメリイ教授の遠縁か何かにあたつていて、それでチャーレスを知つていたのである。チャーレスを知つてゐるということは、むろん、彼の変人ぶり、気狂いぶりを知つてゐるということにほかならない。

私より五つ年下のくせに、レットはときどき兄貴のような口をきいた。外国の社会へ入ると、人は、しばらく子供になるらしい。言葉の不自由、習慣の不慣れ。そのとき現われる救世主は、たとえばほんの子供であっても、十分に大人の貫録をもつ。レットの場合がそうだった。私のまえにはじめて出現したとき、彼は私の保護者であり兄貴であつた。日本人は若く見られる。レットは最初、私の年齢を二十歳とふんだ。レットがいまだにときどき兄貴ぶるのは、われらの交遊の初期の記憶のせいなのであろう。

つづきは製品版でお読みください。